

〔巻頭言〕

大学紀要への期待

機能看護学講座教授 栗田 孝子

大学の使命は教育と研究である。その歴史として本学紀要の内容を眺めてみると、1. 教育実践活動の開発や評価を素材とした教育実践研究、2. 現地看護職との『共同研究』活動をもとにした研究報告が多いという特徴がある。このことは、まさに本学の教育理念に基づいたものと言える。すなわち県民の求める生活を保障するために、看護専門職としての責任を遂行できる人材育成が教育実践活動としての研究であり、県内看護職との『共同研究』は、県民が享受する看護の質向上を追求する研究報告である。このように教員が教育あるいは看護職との関わりをとおして常に看護を追求する姿がここに掲載されているように思う。

筆者は長く保健分野の行政に携わっていた経験から、大学紀要に関心をもち手にしたのは、本学の教員になってからであり、ここに私見を述べるのは僭越であると思いつつ、大学紀要への思いを述べてみたい。

読者としての活用には、筆者が所属していない他講座の教員は何に関心をもち、何が専門であるかは掲載された論文によって知った。また、自分が投稿しようと考えたとき他の人は、どんな研究方法でどのような研究に取り組まれているのかも学ぶことができた。そして自身の投稿には、さまざまな視点から査読の意見をもらい自己の考えを整理するなど自身の Faculty Development になったと思う。

学会誌での査読は、その専門領域の先生方の査読であるのに対し、本学の査読は教員間査読であり、専門の異なる他領域の教員が査読に加わるので視野を広く意見を得ることになる。これが説明責任の難しさを感じたと同時に自分の研究を客観視する大きな機会になった。また、査読のスピードが速く、投稿がタイムリーに議論する場にもなった。

本学では看護学を取り巻く状況に対応するため4大講座制がとられており、筆者の所属する講座、『機能看護学』

は他大学にない基礎看護学の一つであり、本学の特徴と考えている。当初は教育内容も手探りで、機能看護学を構築することを目指し、他者の批判を受けてさらに学問として発展させるための説明責任を果たす意味と看護以外の分野の教員が所属している意味を考え、本学紀要から3年遅れて機能看護学講座の紀要『教育と研究』を発刊した。これには教育実践に関する方法や内容、教員の研究に関するもの、他大学との交流などで、講座の教員が自由に執筆する論文の掲載であった。機能看護学の教育の方向が教員間で共通理解されたことと教育実践研究が本学紀要と重複し単科大学で2つの紀要を発刊する必要性などから2008年に6巻をもって閉刊した。

大学も開学期を経て、成長発展期を迎える。紀要はその一翼であり、より一層の発展を期待したい。特記すれば現地看護職と大学教員が、対等の立場で現場の看護の質向上を図る『共同研究』は、本学の独自の取り組みとして今後も重要な取り組みであることは間違いない。そして研究の蓄積を論文として社会に発信していく責任が教員にはある。

本学の『共同研究』は、実践の場で看護職が感じている問題意識に目を向けた研究であるのに対し、研究を使命とする教員自身が自らの問題意識に基づいた研究をもっと発信してほしいと願っている。日々研鑽した研究を紀要に蓄積し、ひいては教員のライフワークに繋がるように紀要を活用し、価値を高めてもらいたいと願っている。